

世界大戦を越えて

—サリンジャーとフィッツジェラルド

Over the World Wars :
J. D. Salinger and F. S. Fitzgerald

田中啓史
Keishi TANAKA

1 はじめに

J. D. サリンジャーとF. S. フィッツジェラルドは親子ほどの世代のちがいがあろうえに、サリンジャーはニューヨーク育ちのユダヤ系、フィッツジェラルドは中西部のミネソタ州出身のアイランド系、と民族的背景も大ちがいが、意外に共通点が多い。まずふたりともごく若い時点で世界大戦を経験していることだ。もちろんサリンジャーは第二次世界大戦、フィッツジェラルドは第一次世界大戦で、入隊したときそれぞれ22歳と21歳だった。サリンジャーが生まれたのは第一次大戦終戦の翌年、フィッツジェラルドは第二次大戦にアメリカが参戦する前年に亡くなっているの、ふたりとも大戦はひとつしか経験していない。(フィッツジェラルドとともにロスト・ジェネレーションの作家と呼ばれたフォークナー、ヘミングウェイ、ドス・パソスは両大戦を経験している。)そして、ふたりともその大戦の勃発を機に作家となったのである。それ以前は芝居に興味があり、戯曲を書いたり、自ら演じていたりしていた点も共通している。

フィッツジェラルドは戦前から詩や戯曲を書いていたが、その評価はいまひとつで、いわば素人の域を出ていない。本格的な小説『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*, 1920)の原型となる「ロマンティックなエゴティスト」("The Romantic Egotist")の原稿を書き出したのは、1917年にアメリカが第一次世界大戦に参戦して、彼もプリンストン大学卒業をあきらめて入隊する直前のことである。サリンジャーも処女作「若者たち」("The Young Folks")が『ストーリー』(*Story*)誌に出たのは第二次世界大戦勃発後の1940年2月のことだ。そしてサリンジャーがデビューしたこの年の11月にフィッツジェラルドは亡くなってしまふ。まるでリレーのバトンをサリンジャーに渡し終えて力尽きたかのようだ。

このとき、フィッツジェラルドは44歳の若さだった。サリンジャーはその倍以上の91歳という長寿を保ったが、1965年46歳のときに最後の作品を発表して以来死ぬまで沈黙を守ったので、作家としての寿命は同じようなものだった。

サリンジャーは処女作を発表後まもなく、ハロルド・オーバー社と代理人の終身契約を結んだが、この社主ハロルド・オーバーこそフィッツジェラルドが無名のころから代理人として、そして友人として終生尽くした男だった。代理人になりたいという申し出がいくつかあったなかから、サリンジャーがハロルド・オーバー社を選んだのは、このフィッツジェラルドとの結びつきを知っていたからにちがいない。また、フィッツジェラルドの死後、サリンジャーは『コリヤーズ』(Collier's)、『エスクワイヤー』(Esquire)、『サタデー・イブニング・ポスト』(Saturday Evening Post)などの雑誌に作品を発表するようになるが、それらの雑誌にフィッツジェラルドの短編が頻繁に掲載されていたことを意識していただろう。いや、それだけではなく、自分こそフィッツジェラルドの後継者なりと自負していた、少なくとも後継者たらんという意欲はあったと思われる。

2 緑のともしび

フィッツジェラルドが両親ともアイルランド系なのはよく知られているが、サリンジャーの母親にも、そして後期の連作「グラス家物語」の母親ベシーにもアイルランドの血が流れている。アイルランドの色といえば緑である。アイルランドは「緑の島」(the Green Isle)あるいは「エメラルドの島」(the Emerald Isle)という愛称をもち、アイルランド共和国の国章は「緑色記章」(the Green)と呼ばれる。ニューヨークでは3月17日の聖パトリック祭にアイルランド系市民が緑一色になってパレードする。

フィッツジェラルドの代表作『グレート・ギャツビー』(The Great Gatsby, 1925)の主人公がひとり暗い庭に立って、入り江のむこうに光る緑のともしびを見つめる姿は読む者に強烈な印象を残す。いとしいデイジーの家の棧橋に光る緑のともしびをギャツビーがはじめて見つけたときの驚きと、くる日もくる日もデイジーへの愛の夢として見つづけた彼の想いは胸にしみる。この緑のともしびはギャツビーの夢のともしびだった。

ギャツビーが死んだあと、大邸宅の跡を訪れた語り手は、その昔はじめて新世界のこの島を見たオランダの水夫たちには、「鮮やかな緑なす乳房として映じた」だろうと想像する。この緑はまさに明るい希望の色だ。ギャツビーの緑のともしびは希望を、愛の夢を象徴している。

サリンジャーもこの希望、愛の夢を象徴する緑を意識しているようだ。短編集『ナイン・ストーリーズ』(Nine Stories, 1953)に収められた「愛らしき口もと目は緑」("Pretty

Mouth and Green My Eyes,” 1951)では、現実には「紫と見まごうほどの深い青」であり、夫のアーサーは「海の貝殻みたいな目」と表現するジョーニーの目を、愛を夢みていた恋人時代には「目は緑」と詩に書いたのだった。同じく『ナイン・ストーリーズ』の「コネティカットのひょこひょこおじさん」(“Uncle Wiggily in Connecticut,” 1948)に登場する娘ラモーナは、想像上の男の子ジミーの目を緑だと言うし、同短編集の「エズメに——愛と汚れをこめて」(“For Esmé— with Love and Squalor,” 1950)では、エズメの弟チャールズの目も緑とされている。そもそも、このエズメという名前も、スペイン語の“Esmeralda”(緑の宝石、エメラルドの意)に由来するという。さらに、最後にエズメから語り手のもとに届く小包は緑色の紙に包まれている。まさに、この語り手は緑の宝石たるエズメと緑の目のチャールズからの手紙、そして緑の贈り物を受け取って、愛と希望をとりもどすのだ。

「フラニー」(“Franny,” 1955)のヒロインが大切に持ち歩いていた『巡礼の道』(*The Way of a Pilgrim*)は黄緑色のクロス装の本だった。『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*, 1951)の主人公ホールデンの弟アリーは野球のミットに「緑色のインク」で詩を書いていた。単行本未収録(以後「未収録」)の「倒錯の森」(“The Inverted Forest”, 1947)のレイはアルバイト先で客の未亡人に毎晩「緑色のインク」で詩を書いた紙切れをもらって、詩に目覚めたのだった。

このように、サリンジャーの作品にはいろんな緑があふれている。そして、そのどれもが希望や愛の夢という色彩を帯びている。そしてそこには、目にしみるような、ギャツビーの緑のともしびが光っているような気がしてならない。そして、敬愛するアイルランドの先輩フィッツジェラルドの後継者たらしとする思いがこもっている。

これまで紹介してきたように、サリンジャーの母マリー(結婚後ミリアムに改名)はアイルランド系だというのが通説だったが、2010年にケネス・スラウエンスキーが出したサリンジャーの伝記(Kenneth Slawenski, *J. D. Salinger: A Life Raised High*, Pomona Books, 2010)は、ドイツ系だと主張している。国勢調査などで追跡調査したものでかなり信憑性が高いが、それによると、マリーがサリンジャーの父ソルと結婚したとき、マリーの父親は死亡、母親は再婚していたので、彼女は実家のことをあまり話したがらなかったらしい。彼女の赤い髪を見たソルの両親(サリンジャーの祖父母)が「アイルランド人みたい」と言ったのを、そのままにしていたのだという。サリンジャーの8歳年上の姉ドリスは死ぬまで自分の母親はアイルランド生まれだと信じていたというから、サリンジャー本人もそう信じていたのだろう。

それにしても、サリンジャーが自分の母親の出自についてなにか疑問を抱くことはなかったのだろうか。プリンストン大学やテキサス大学に保管されているサリンジャーの私信を見るかぎりでは、それらしい記述はない。2010年、サリンジャーの死後にニューヨークのモルガン・ライブラリーは、サリンジャーが『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の表紙をデザ

インした画家のマイケル・ミッチェルと交わした手紙を公開した。そこには年老いた母親を訪ねたときのエピソードなどが語られているが、アイルランド系云々の話はない。ただ、なんらかの情報があって、母親はアイルランド系ではないのでは、という疑問を抱くようなことはあったかもしれない。それでもきっと、サリンジャーは母親がアイルランド生まれだと信じたかったのではないだろうか。フィッツジェラルドの後継者としてのサリンジャーには、アイルランドの血が必要だったのだ。

3 フィッツジェラルドへの傾倒

サリンジャーとフィッツジェラルドを作家として比べてみると、フィッツジェラルドは主なものだけでも未完の『最後の大君』(*The Last Tycoon*, 1941)を含めて長編小説5、短編集5、戯曲1、そのほか膨大な数の短編を書いた。サリンジャーは長編小説として『ライ麦畑でつかまえて』(「長編」というほど長くはないが)が1冊、短編集1、中篇を2つまとめて1冊にしたものが2、単行本としてはこの4冊きりである。そのほかに雑誌に発表したまま単行本に収録されていない、いわゆる「未収録」(“Uncollected”)と呼ばれる短編が22ほどあるが、フィッツジェラルドに比べるとかなり少ない。それでも、ふたりとも自分をモデルにした、あるいは、そこまであからさまでなくとも、自分の人生を反映した作品を書くことが多かった作家である。それに、フィッツジェラルドの後継者をもって任じていたサリンジャーは、自作のなかでしばしばフィッツジェラルド、あるいはその作品に言及している。

たとえば「未収録」の「よそ者」(“The Stranger,” 1945)では、戦友の戦死をもと恋人に伝えに行った主人公が、訪ねたアパートの部屋の本棚にフィッツジェラルドの『美しき呪われし者』(*The Beautiful and Damned*, 1922)を見つけて、「持ち主はだれか、また愛読者はだれか」と思う場面があるし、未発表で原稿が確認できる数少ない短編のひとつ「ボーリングボールでいっぱい海」(“Ocean Full of Bowling Balls,” 1945)では『夜はやさし』(*Tender Is the Night*, 1934)が言及されている。

しかし、登場するのが圧倒的に多いのは『グレート・ギャツビー』だ。「未収録」の「最後の休暇の最後の日」(“Last Day of the Last Furlough,” 1944)の主人公ベープは久しぶりの休暇を、自分の部屋であれこれ本を読んで過ごしている。そして、「1時間前にはジェイ・ギャツビーこと本名ジェイムズ・ギャッツの偉大にして、大きな悲しみに満ちた芝生を横切っていた」と、ギャツビーの世界にひたりきっている。『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンも、ヘミングウェイの『武器よさらば』はインチキな本できらいだが、『グレート・ギャツビー』なんか大好きなんだ。ギャツビーの奴、友だちに呼びかけるときに『ご同輩』

とかなんか言っちゃってさ。あれには参ったね」と、すっかりギャツビーの友だち気どりで。作者サリンジャーの分身たるグラス家のバディは「ズーイ」(“Zooney,” 1957)のなかで、『グレート・ギャツビー』は12歳のころの私の『トム・ソーヤー』だった、と述べている。

また、フィッツジェラルドの作品名そのものではなく、作品のなかのエピソードが借用されている例もある。『グレート・ギャツビー』の最後の場面で、ギャツビーが死んだあとに廃墟となった彼の大邸宅を訪れた語り手ニックは「どこかの子供がレンガのかけらで書いた卑猥な言葉」を「靴でごしごしこすって消した」とある。いっぽう、『ライ麦畑』のホールデンは、妹フィービーが通う小学校の壁に「ファック・ユー」の落書きを見つけて消す。ただ、2度目に見つけた落書きはナイフで彫ってあって消せない。3度目に博物館で見つけたときは、世界中の落書きは消しきれない、と絶望してしまう。同じようなエピソードでも、やりきれない現実がよりいっそう重くのしかかってくるように作り変えられている。

また短編集『ナイン・ストーリーズ』に収められた「エズメに——愛と汚れをこめて」のなかで、エズメが野蛮なアメリカ兵を非難して、「まるで動物みたい、殴りあったり、のしりあったりばかり」と言うと、語り手は「兵隊たちはたいてい故郷から遠く離れている。めぐまれた境遇 (advantages in life) にあるものはほとんどないのだ」と論ず場面がある。これは『ギャツビー』の冒頭で紹介されている、語り手ニックが父親から与えられたアドヴァイスの「誰かのことを批判したくなるときは、世間すべての人がお前のように恵まれた境遇にあるわけではない、ということを考えるように」という言葉とほとんど同じだ。

4 戦争体験

フィッツジェラルドが第一次世界大戦を、サリンジャーが第二次大戦を経験していることは最初に述べたが、このふたつの大戦には共通点が多い。アメリカが第一次大戦に参戦したのは、1914年の大戦勃発から3年たった1917年、第二次大戦では1939年の大戦勃発の2年後の1941年に参戦している。つまり、アメリカはどちらの大戦にも途中から参戦しているのだ。イギリスやフランスと連合を組み、ドイツが主たる敵国だったことも共通している。そして、これらのふたつの大戦に勝利することによって、アメリカは世界の大国へ、最強国への道を登りつめたのだった。

ただ、ふたりの「戦争体験」の質はかなりちがうものだ。フィッツジェラルドの場合は、1917年4月にアメリカがドイツに宣戦布告したあと、同級生の多くが卒業式を終えて軍の訓練隊へ入っていくなか、卒業できない彼は故郷のミネソタ州セントポールに帰って、陸軍少尉の任官に必要な試験を受けた。その後、各地の基地で訓練を受けながら処女作となる小

説を執筆し、原稿を出版社に送っては送り返される、という日々を過ごしていたが、戦地での実戦を体験しないまま、1918年11月の終戦を迎えたのだ。

サリンジャーは、1941年12月の日本軍による真珠湾攻撃からアメリカが突入した第二次大戦に軍人として参加すべく志願したのだが、軽い心臓疾患のため入隊を認められなかった。1942年4月、軍の入隊資格の基準が下げられ、サリンジャーは晴れて陸軍に入隊した。その後、各地の基地で訓練を受けながら執筆していた点はフィッツジェラルドと同じだが、44年イギリスのデヴォン州に防諜部隊の一員として配属され、同年6月6日のノルマンディ上陸作戦に参加、以後45年5月のドイツ降伏までいくども激戦を経験した。なかでもヨーロッパ戦線でもっとも熾烈な戦闘といわれるヒュルトゲンの森の攻防戦は、アメリカ、ドイツ両軍に歴大な死傷者をもたらした。サリンジャーは心身ともに傷ついて、ニュールンベルクの病院に入院したほどだ。

サリンジャーの作品はこのような強烈な戦争体験を反映したものが多い。同じ軍隊を題材にしたものでも、入隊前に書いた「未収録」の「そのうちなんとか」(“The Hang of It,” 1941) や「ある歩兵についての個人的メモ」(“Personal Notes on an Infantryman,” 1942) は「意外な結末」だけが売り物のショート・ショートだが、1944年の「最後の休暇の最後の日」では海外出兵直前の兵士の家族との交流を描き、「新兵フランスにて」(“A Boy in France,” 1945) では戦闘の合間の戦場での兵士の孤独と恐怖を、そして郷愁をみごとに描くなど、次第に戦争の本質をつく作品を書くようになっていく。

一見、戦争とはあまり縁がなさそうな『ライ麦畑でつかまえて』は1951年の発表だが、その発表にいたるまでアメリカ参戦の前から戦中、戦後と10年にわたって、主人公ホールデンとその親兄弟について、10編ほどの短編を書き継いできており、そこではホールデンもその兄弟も戦争中に死に絶えているのだ。死んでしまったホールデン兄弟を復活させて完成した『ライ麦畑』は、それゆえ、戦争の影を色濃く落としている。

『ナイン・ストーリーズ』(Nine Stories, 1953) はサリンジャー自身の戦争体験をふまえて1948年から書き出した短編を集めたものだが、帰還兵士の主人公が戦争中も平和な本国内で生きてきた妻との隙間を埋められず、自殺してしまうという衝撃的な結末の「バナナフィッシュにうってつけの日」(“A Perfect Day for Bananafish,” 1948) や、戦争で心身ともに深く傷ついた主人公が、イギリスの田舎で訓練中に会った少女からの手紙とプレゼントで救われる「エズメに——愛と汚れをこめて」など、戦争を主題とする秀作が数点含まれている。それらの短編のなかで私がとくに注目したいのは、さほど実戦体験と関わりがなさそうな「コネティカットのひよこひよこおじさん」である。

5 戦時下の恋ふたつ

「コネティカットのひよこひよこおじさん」は1948年3月に雑誌『ニュー Yorker』に発表されたものだが、この1948年という年は1月に「バナナフィッシュ」、6月に「対エスキモー戦争の前夜」(“Just Before the War with the Eskimos,” 1948)と、わずか半年のあいだに、日常生活のなかに潜む戦争の影を描く秀作を3作も書いた年なのだ。そして、10年かけて書きつづけてきた『ライ麦畑でつかまえて』も、長編という形で完成しようとしていた時期だ。サリンジャーの戦争体験が、そして帰還してからの戦後体験が、ようやく熟して最良の形で表現されるときを迎えていたのだろう。

さて、私が「コネティカットのひよこひよこおじさん」に注目するのは、この作品がフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』と深く関わっていると考えるからである。まず、このふたつの作品のストーリーを整理しておきたい。

『グレート・ギャツビー』は中西部からニューヨークへ出てきたニックが語る、同じく中西部出身の隣人ギャツビーの「ロマンティックな」失恋の物語という体裁の長編小説である。週末になると催されるギャツビー邸での派手なパーティに招待されて彼との交際を始めたニックは、彼が自分の「また従姉妹」のデイジーに会いたがっていることを知る。ギャツビーは戦時中にデイジーの故郷のケンタッキー州ルイヴィルで彼女に出会って恋に落ちたものの、ギャツビーがヨーロッパに派兵され、終戦後アメリカに戻るのが遅れているあいだに、デイジーはシカゴの富豪トムと結婚してしまったのだ。

戦後、あやしげな仕事もこなして財を築いたギャツビーは、5年の空白、そしてなによりもデイジーが結婚して子供もいるという現実を無視して、過去を取り戻してデイジーを自分のものに出ると信じている。ニックの手配でふたりは再会し、恋の炎は再び燃え上がった、とみえたのだが、デイジーは浮気者の夫トムに不満だらけながら、現在の生活を完全に捨て去る気はない。そんななか、ギャツビーはニック、トム、デイジーなどとマンハッタンで過ごしたあと車で帰途につくが、デイジーの運転する自分の車がトムの愛人をひき殺してしまう。死んだ愛人の夫はギャツビーが運転していたものと思い込み、ギャツビーを射殺する。事件後、デイジーもトムもことの仔細はいっさい語らない。そして、ギャツビーの葬儀に立ち会ったのは数名の使用人と一人の食客のほか、急遽ミネソタから駆けつけた父親とニックだけだった。その後トムの何事もなかったかのような態度を見てあきれはてたニックは、ニューヨークを捨てて中西部の故郷へ帰る決意をするのだった。

いっぽうの「コネティカットのひよこひよこおじさん」はふたりの女性の会話を中心に構成された短編である。物語はコネティカットの高級住宅地に住むエロイズを、大学時代のルームメイトだったメアリ・ジェーンが訪ねてくるところから始まる。ふたりとも在学中に兵士との恋愛事件がもつて中退した仲だ。昼間から酒を飲みながら昔の友人や教師の噂話を

しているうち、終戦直後に日本で事故死したエロイーズの昔の恋人ウォルトに話がおよぶ。彼は上官の命令で荷造りしていた日本製のストーヴが爆発して死んだのだった。

子供のころ、脚の悪いウサギが主人公の童話「ひよこひよこおじさん」が好きだったウォルトは、足首をくじいたエロイーズを「足首」(ankle)と「おじさん」(uncle)をひっかけて、「かわいそうなひよこひよこおじさん」(“Poor Uncle Wiggily”)と呼ぶユーモアの持ち主だった。それに比べ、現在の夫ルーは教養もユーモアのセンスもない現実主義者だが、エロイーズもそれに合わせるように自堕落な妻となり、家事はおざなり、幼い娘ラモーナにも目が届かない。孤独な娘は架空の恋人をつくりあげ、自分だけの世界に閉じこもっている。娘に架空の恋人がいることにさえ嫉妬したのか、エロイーズは酔いにまかせて、その恋人を取りあげようとする。母親の仕打ちに必死で耐える娘の姿に、ハッと我にかえったエロイーズは、メアリ・ジェーンに、大学の新生入だったころにアイダホ州の田舎で買ったドレスをからかわれて泣いたことを話して、あのころは「あたし、いい子だったわよね？」と訴えるところで物語は終わる。

いまでは人妻となった恋人を取り戻したいという夢を抱いてかなわず、その恋人の身代わりになって死ぬヒーロー、このロマンティックな長編小説『グレート・ギャツビー』と、数年の結婚生活を経て夫にも娘にも愛情がもてず自堕落な生活を送る女が、キャリアガールの友人と昼間から酒を飲みながら昔話をしてダラダラと時間をすごす、というこの短編になにか共通点があるのか、と疑問に思う人が多いだろう。だが、ふたつの物語の枠組みや主題をくらべてみると、驚くほど似ていることに気づく。

まず、(1) どちらのヒロインも戦争で恋人の兵士と別れ、別の男と結婚して娘が生まれる。どちらの夫も似非インテリだ。そして、どちらのヒーローも死ぬ。さらに、どちらのヒロインにも独身時代からの女友達がいるのだ。

(2) どちらのヒロインも西部(正確にいえば、デイジーの出身地ケンタッキー州は中東部だが、結婚して住んだシカゴは中西部。エロイーズの出身地アイダホ州は北西部)から東部のニューヨークに移り住んで堕落する。

(3) 「取り戻すことのできない過去」という主題。ギャツビーは「過去は取り戻せる」と信じて玉砕する。エロイーズは、ウォルトと過ごした、自分が「いい子だった」青春時代が二度と戻らないことを知りながら、あるいは知っているからこそ、過去に救いを求めるしかないのだ。

6 「ナイス」とは？

このような共通点があることから、サリンジャーは「コネティカットのひよこひよこおじさん」という作品で、『グレート・ギャツビー』を自分なりに再構築しようとした、とみることができる。あるいは『グレート・ギャツビー』という作品そのもの、作品全体を自分の作品にしようとしたともいえるだろう。サリンジャーには、ギャツビーが死んだあとのデイジーの日常を描く、いわば『グレート・ギャツビー』の後日譚を書く、という発想があったのかもしれない。

じつは、サリンジャーはこの「ひよこひよこおじさん」を書くにあたって、『グレート・ギャツビー』を意識していたという証拠を作品のなかに残している。この短編はエロイーズの「あたし、いい子だったわよね？」（“I was a nice girl, wasn't I?”）というセリフで終わる。大学1年生のとき、アイダホ州からニューヨークへ出てきた山出しの娘エロイーズは、故郷で買った茶色と黄色のドレスを、同級生から「ニューヨークじゃ誰もそんなドレス着ないよ」とからかわれて一晩中泣き明かしたことがあった。いまとちがってそんな純情なときもあった、という「失われた過去は取りもどせない」ことを象徴的に表わすエロイーズのセリフなのだが、この「いい子」（“nice girl”）という言葉が『グレート・ギャツビー』にも使われていたのだ。第8章の冒頭、デイジーが事故を起こした日の夜、ギャツビーは若いころの「修行時代」について、そしてデイジーとのなれそめについてニックに語る。そこで、デイジーは次のような文章で表現されている。

She was the first “nice girl” he had ever known.

この“nice girl”の引用符は原文に付けられていて、特別な意味をもつことを表わしている。この“nice”という言葉について考えてみよう。「ナイス」という日本語でも通用しそうな、やさしい言葉のようだが、意外に一筋縄ではいかないやっかいな言葉である。一般的な英和辞典を引くと、「1) よい、立派な、楽しい、愉快的な 2) 親切的な」などの訳語が示され、1) の場合は「意味があいまいなので書き言葉には用いない方がよいとされる」（『ジーニアス英和大辞典』）とある。また、この意味の反対の「好ましくない」という皮肉なニュアンスで用いられることもある。そのほかに、やや古い用法として、「上品な、育ちがよい」というのがあり、デイジーの描写ではこの意味で使われているようだ。『ギャツビー』のこの部分の日本語訳をいくつか紹介する。

野崎孝 訳：彼女は、彼がはじめて知った「良家の」娘であった。

村上春樹 訳：デイジーは彼が生まれて初めて知った「良家の」娘だった。

小川高義 訳：デージーは、この男が出会った女としては初めての「お嬢さん」なのだった。

これらの訳からデージーに関する“nice”はやはり、「上品な」「すれっからしでない」「育ちのよい」くらいの意味で使われていることが分かる。ギャツビーは中西部の貧農のせがれジェイムズ・ギャッツで、ジェイ・ギャツビーと名を変え、正体も偽ってデージーに近づいたのだ。彼は「良家の」娘を手に入れたが、「彼女がいったんその豪華な家の中に、豊かで満ち足りた暮らしの中に消えてしまうと、ギャツビーはひとりぼっちであとに残された」(第8章)のである。つまり、デージーの“nice”はアメリカにおける「上流階級」、いいかえれば「金」が生み出したものだった。彼女の魅惑的な声にも「ぎっしり金が詰まっている」(第7章)ことを、ギャツビーも承知してはいるのだ。

ヒロイズの“nice”はデージーの場合と同様の「上品な」「すれっからしでない」というニュアンスもあるが、そこに「階級意識」はない。同じようなニュアンスの“nice”という言葉を使いながら、このような階級意識の有無はどうして生じるのだろうか。『グレート・ギャツビー』におけるトムやデージーは、生まれながらに親の資産を受け継いでいる有産階級であり、そんな金持ちの娘と結婚できない現実にたいするギャツビーの怒りは、作者フィッツジェラルドの怒りでもあった。プリンストン大学に在学中、故郷に帰った彼は前途有望な青年としてもはやされる快感を味わった。そんなとき、地元で催されたダンスパーティで知り合った金持ちの娘ジニヴラ・キングに恋して2年ほどつき合うが、結局はふられてしまう。フィッツジェラルドは自分の個人的な覚書に「貧しい青年は金持ちの女の子と結婚することを考えてはならない」と記し、生涯この思いを抱いていたのだ。

フィッツジェラルド自身は1920年にアラバマ州最高裁判事の娘ゼルダを妻にしていて、上流階級の娘との結婚を果たしている。じつはこのふたりは1918年第一次大戦の最中にパーティで知り合って恋に落ちたのだ。フィッツジェラルドは21歳、18歳のゼルダは「ジョージア、アラバマ両州にならぶもののない美人」と評判の美少女、二人はすぐに婚約するが、いつまでたっても作家として芽の出ない彼に失望したゼルダは翌19年6月に婚約を破棄する。ところが、何度も出版社から原稿をつき返されていた『楽園のこちら側』の出版が決まると、11月に再び婚約。20年3月26日に出版されると、24時間で初版売り切れ、1週間で2万部売れるベストセラーとなり、4月3日にニューヨークのセント・パトリック教会で挙式となった。

しかし、この結婚のあと、妻ゼルダの浪費やパーティ続きの派手な生活を支えるため、フィッツジェラルドは書きまくって稼がなくてはならなくなり、じっくり作品を推敲するゆとりを失っていくと同時に、生活が荒れていく。やはり、「貧しい青年は金持ちの女の子と結婚することを考えてはならない」という思いは彼のなかに生き続けていたのだ、と思われ

る。そして『グレート・ギャツビー』にもこの思いが生かされている。

サリンジャーも『ナイン・ストーリーズ』のなかの「笑い男」(“The Laughing Man,” 1949)という作品で、似たような状況の男を登場させている。あきらかに東欧系(ユダヤ系の可能性が大)と思われる醜男の苦学生ジョン・ゲザツキーは少年たちには憧れの存在だが、名門女子大出の美人メアリ・ハドソン(アングロサクソン系の名前だ)とは結ばれない。サリンジャーの作品の登場人物は中流階級がほとんどで、このような主人公たちの人種的、経済的背景のちがう設定はめずらしい。どちらかといえば、扱い慣れない設定をあえて採用したのは、「コネティカットのひよこひよこおじさん」で『グレート・ギャツビー』の再構築を試みたサリンジャーが、そこでやり残した「貧しい青年は金持ちの女の子と結婚できない」というテーマを、翌年の「笑い男」で生かそうとしたのではないだろうか。それほど『ギャツビー』の再構築にかけたサリンジャーの気持ちはつよかったのだ。しかも、「金持ちと貧乏」という経済的な格差だけでなく、人種的な差別をも盛り込んで作者自身の状況をよりリアルに反映させている(サリンジャー自身は貧乏ではなく、長身でハンサムでもあったが、当時ユダヤ系にたいする差別はひどかった)。そして、それを子供の目をとおして描くことで、「大人の世界」の不当性を強調しているのだ。

この「笑い男」を唯一の例外として、サリンジャー作品の登場人物は階級差があまりない。そんな作品世界に生きるエロイズの“nice girl”は、「良家の子女」というより「すれっからしでない、まともな女の子」というニュアンスになる。

ウォレン・フレンチはその著書『サリンジャー研究』(Warren French. *J. D. Salinger*, Boston: Twayne, 1963)で、第2章を「インチキな世界とナイスな世界」(Phony and Nice Worlds)と題して、この「コネティカットのひよこひよこおじさん」を論じている。フレンチによれば、この作品は「インチキな世界」と「ナイスな世界」が並立している、めずらしい例だという。ウォルトと過ごした過去はナイスな世界で、現実はいんちきなのだ。それはタイトルにも示されていて、コネティカットはいんちきな現実、童話の「ひよこひよこおじさん」はナイスな世界のものだ。

フレンチのこの分析は一応納得がいくとしても、はたして「ナイス」は「インチキ」の対極にくるほどの価値をもつものだろうか。エロイズはいまは「すれっからし」になって、「ナイス」ではなくなっているが、もともと「ナイス」にそんなたいした価値はなかったのではないだろうか。デージーは「ナイスな(良家の)」娘だったが、「良家の」という意味では現在もナイスである。つまり、彼女は「良家の子女」という階級に属し、育ちに金がかかっている、というだけで、自分の罪も金で隠してしまう、人間的な本質は「インチキ」な女なのだ。サリンジャーはこの「ひよこひよこおじさん」で、「ナイス」のインチキ性をも暴こうとしているのではないだろうか。

7 エロイーズ結婚の真相

エロイーズは、昔はいい子「だった」(“was”)と過去形が使われているから、現在は「いい子ではない」ということになる。そこに「取り戻せない過去」という主題が浮かび上がってくるわけだが、ウォルトに関しても、エロイーズが「ああ、ほんとにいい人だった」(“... God, he was nice.”)と言っている。この場合の過去形はウォルトが「ナイス」でなくなった、ということではなく、「ナイス」なウォルトの存在自体が「なくなった」ということを意味していて、そこにも「取り戻せない過去」の主題がある。

エロイーズは墮落した現在の自分と、愛せない夫のいる現実から離れて、ウォルトと過ごした青春時代を懐かしみ、そこに救いを見出そうとしている。彼女には「すべては戦争が悪いのだ。あたしから恋しいウォルトを奪ったのも戦争だ」との思いがある。そこに「現実逃避」の姿勢は見られるものの、いまは亡き恋人をいつまでも思いつづける、というロマンティックな精神の持ち主だともいえる。この「現実」を無視した「ロマンティックな」精神という点では、エロイーズとギャツビーは相通じている。

エロイーズのこの「ロマンティック」性を考えるために、エロイーズの結婚とウォルトの死の関係を調べてみたい。まず、エロイーズはいつ現在の夫ルーと結婚したのだろうか。これは娘のラモーナの年齢から推測するしかない。年齢は書かれていないが、ラモーナは4、5歳だと思われる。というのも、この娘はひとりで外に遊びに出かけたり、「ずっと会ってない」というメアリ・ジェーンが「あたしのこと覚えてないわよねえ」と訊いても、ちゃんと名前を覚えている。眼鏡をかけさせられていること、漫画の主人公から連想したのか、架空の恋人をつくりあげ、ジミー・ジメリーノとかミッキー・ミケラーノとか名前をつける。これらのことからして、2、3歳とは考えにくい。

「コネティカットのひよこひよこおじさん」が『ニュー Yorker』に掲載されたのは1948年3月である。サリンジャーは作品世界の現在を作品発表(執筆)の時期とするのが普通だ。エロイーズの家の外では雪が降っているから、この物語の現在は1947年末か1948年初めということになる。そうすると、ラモーナが生まれたのは1942年か43年、エロイーズの結婚はおそくとも41年か42年だろう。

それではウォルトが死んだのはいつか考えてみよう。「ウォルトの友人」の手紙によると、彼は「戦闘かなんかのあいまの小休止」に「日本製のストーヴを荷造り」しているとき、「ガソリンやなんかがいっぱいはいってる」ストーヴが爆発して死んだ、という。「戦闘のあいま」なら終戦より前になるが、戦利品と思われる「日本製のストーヴ」が手に入るのは、終戦後アメリカが日本を占領してからのことだ。戦争中の太平洋南海諸島や沖縄戦線に日本製のストーヴがあるはずがないからだ。この矛盾は手紙を書いた「ウォルトの友人」の「戦闘かなんかのあいま」という曖昧な表現のせい、エロイーズのうろ覚えのせいだろう。なに

しろ、ストーヴを「荷造りしてた」のか、包みなおすので「箱から取り出す」ところだったのかさえ、エロイーズははっきり覚えていないのだから。とにかく、彼女には「ウォルトがストーヴの爆発事故で死んだ」という事実だけが重要だったのだ。とすると、「戦闘やなんかのあいま」というのは事実ではないかもしれない。つまり、この事故は終戦直後のことではないか、と思われてくる。サリンジャー自身もこのウォルトの死の時期の曖昧さが気になったのか、「大工よ、屋根の梁を高く上げよ」(“Raise High the Roof Beam, Carpenters,” 1955)では、ウォルトは「1945年の晩秋、日本で」死んだと明記している。

ウォルトが1945年に日本で事故死しているとなると、彼女はウォルトが死ぬ前に、おそらく彼が太平洋戦争の前線に出て行く前に、結婚していたのだ。この物語を読んだ印象では、ウォルトの死を知ってあきらめたエロイーズが、経済的な事情も考えて、現在の夫ルーとの妥協的な結婚にふみきったような感じがするが、実情はまったくちがっている。

サリンジャーはどうして読者にこんな誤解をあたえるような設定をしたのだろうか。じつは、これは彼が意図したことではない。作品が発表された時期を考えれば、サリンジャーが意図して読者をワナにかけたわけではないことがわかる。私たちは「エロイーズはウォルトの死を知ってルーとの結婚にふみきった」という印象を受けるが、それは現在の日本の読者の印象であって、発表された1948年当時のアメリカの読者はちがった印象をもったのではないかと思う。終戦後2年ちょっとしかたっていない当時、夫や恋人を亡くした女性は周囲にいたろう。そんな女性が結婚して子供が生まれたとしても、1948年にはせいぜい1歳かそこら、とてもラモーナのような「大きな」子供がいるはずがない。そのことに気づいた読者は案外多かったのではないだろうか。しかし、この作品が短編集『ナイン・ストーリーズ』に収録され、ベストセラーとして長く読み継がれていくうち、アメリカでもこの作品世界の現在とウォルトの死(終戦)の時期との関係が忘れられていったのかもしれない。

エロイーズは1942年、大学2年のなかごろ(9月が新学期のアメリカではその年の初頭ごろ)に、寮のエレベーターのなかで兵隊といっしょにいるところを押さえられて退学したという。この兵隊がウォルトなのだろうが、彼女の結婚の時期と微妙に重なってくる。ウォルトとつきあいながら、彼女には結婚相手が別にいたことになるのだ。ウォルトは彼女にとって、複数のボーイフレンドのひとりでしかなく、別の男と結婚して娘が生まれ、終戦後ウォルトの死を知った、というのが真相なのではないだろうか。そして、エロイーズが自堕落な生活を送るうちに、生前はそれほどの意味を持っていなかったウォルトが、その死をきっかけに「ロマンティックな」存在として彼女のなかで肥大化していったのだ。「死んだ」ウォルトは彼女による理想化を妨げることはないのだから。

「ひょこひょこおじさん」発表当時の反応の一例として、この作品の映画版をみてみよう。サリンジャー作品では唯一映画化されたもので、作品が『ニューヨーカー』に出た1948年のうちに映画化が決定、49年に完成、「愚かなり 我が心」(“My Foolish Heart”)

のタイトルで50年1月に封切られている。評判は上々で、主題歌はオスカーを取り、主演のスーザン・ハイワードもオスカーの候補にあげられたほどだった。しかし、完成した映画を観たサリンジャーは激怒し、これ以後は自作の映画化はもちろん、芝居やラジオドラマにという申し込みもいっさい受けつけなかった。

映画版では兵士ウォルトと恋愛中のエロイズは彼の子供をみごもる。ウォルトはそのことを知らないまま、国内で飛行訓練中に事故で死んでしまう。エロイズはメアリ・ジェーンの恋人ルーが以前から自分に好意を寄せていたことを利用して、彼と結婚する。その後、生活が乱れて夫婦関係も悪化し、エロイズは娘を引き取って離婚、ルーとメアリ・ジェーンは結ばれる。

この映画にはエロイズの両親も登場してコミカルな味を出すなど、ルーとメアリ・ジェーンが結ばれる結末以外にもかなり原作に脚色が加えられているが、ルーとウォルトがエロイズの複数のボーイフレンドであることに注目したい。ふたりがエロイズの周辺にいる時期が重なっている、という見方を映画の製作者はしたわけだ。

ラモーナという娘の父親がウォルトになっているのは原作無視とも思えるが、原作を詳しく読んでみるとそうでもない。ウォルトとつき合っていた時期と娘の誕生が微妙に重なることはすでに述べた。ウォルトとエロイズが汽車に乗っていたとき、彼は彼女のお腹に手を当てて、「きみのお腹はほんとにすばらしい」と言った、というエピソードが語られている。これは単に彼女のお腹を賛美しているだけなのだろうか。それより、彼女が妊娠していると考えたほうが自然ではないだろうか。

また、子供はラモーナひとりの彼女が、近所では「安産尻」（原文では“Fertile Fanny” たくさん子供を生むお尻）と呼ばれている。いくら子供のいない家庭が多い地域でも、ひとりしか子供のいない母親を悪意あるこんなあだ名で呼ぶのは異常だ。これは、エロイズが花嫁としてこのコネティカットの高級住宅地の新居にやってきたとき、すでに人目につくほどお腹が大きかったか、もう赤ん坊がいたからではないか。その子供が結婚したルーの子ではなかったという可能性もある。となると、映画の設定とつじつまが合ってくる。

ラモーナの父親がルーであれ、ウォルトであれ、物語の根本は変わらない。エロイズはたしかにウォルトとすばらしい青春時代を過ごした。そして、戦争が始まって、若者の明るい青春は暗転したのだ。

8 アメリカ人の戦争

エロイズは現実主義者だった。何人かいるボーイフレンドのなかから、コネティカットの高級住宅地に住む男を結婚相手に選んだのだ。ときおり、酔いにまかせて理想化された

ウォルト、つまり肥大化した存在のウォルトの夢をみるが、ふだんは平凡な日常にどっぷりひたりにきっている。こうして、悲壮なロマンティストであるギャツビーの悲劇は、サリンジャーによって、過去の夢に酔うだけの現実主義者エロイーズの物語に再構築されたのだ。

ギャツビーのロマンティックな自己犠牲の悲劇は、ある意味で「美しい」が、エロイーズの現実的な日常の物語は醜い。サリンジャーはどうしてフィッツジェラルドの「美しい悲劇」を「醜い日常の物語」に作り変えたのだろうか。そこにはふたりの戦争体験の質のちがいが関わっているような気がしてならない。戦争体験の質のちがいは、いうまでもなく、実戦体験の有無だ。

ふたりの実戦体験の有無を論じる前に、アメリカにおける戦争というものを総括しておきたい。まず、アメリカの戦争の歴史をたどるために、独立戦争からイラク戦争までの主な戦争のアメリカ人戦死者の数をあげておく。

独立戦争 (1775-83)	1万2,000人
.....	
米墨戦争 (1846-48)	1万2,876人
米西戦争 (1898)	5,462人
第一次世界大戦 (1914-18)	11万2,432人
第二次世界大戦 (1939-45)	32万1,999人
朝鮮戦争 (1950-51)	5万4,246人
ヴェトナム戦争 (1954-73)	5万8,000人 (ヴェトナム人 400万人?)
イラン・イラク戦争 (1980-88)	3,000人 (両国民 100万人)
.....	
アフガニスタン戦争 (1978-89)	848人 (アフガン:兵士 9万人 民間人 150万人)
.....	
イラク戦争 (2003-06)	4,356人 (イラク兵士 2万人)
<hr/>	
合計	約60万人
南北戦争 (1861-65)	約62万人

この表でわかることは、アメリカが外国と戦った戦争の戦死者は独立戦争以来すべてを合計しても、国内で戦った南北戦争の戦死者に及ばないということだ。ヴェトナム戦争以後の戦争でも、その戦争の行なわれた現地の死者にくらべてアメリカ兵士の死者の少なさが目立

つ。

次に第一次、第二次の世界大戦の各国の死者の数をみてみよう。

<第一次世界大戦>

アメリカ	11万2,432人
イギリス	91万人
フランス	136万人
ドイツ	177万人

<第二次世界大戦>

国名	戦死・行方不明者	民間人死者	人口比率
アメリカ	32万	0	0.24%
ソ連	750万	700万	12.85%
イギリス	45万	6万	1.07%
フランス	20万	17万	0.90%
ドイツ	250万	230万	6.87%
日本	230万	80万	4.24%
ユダヤ人		600万～700万	?

この表では、アメリカの戦死者がほかの参戦国にくらべて極端に少ないという事実に驚かされる。それは単に死者の数が少ないというだけではなく、国の総人口にたいする割合、人口比率の低さをみても、その差の激しさが一目瞭然だ。民間人の死者にいたっては、第二次大戦の記録だが、アメリカ人はゼロである（第一次大戦でも同じだろう）。

これは何を意味するのだろうか。どちらの世界大戦もアメリカが途中参戦だった、ということも影響しているだろう。それより、民間人の死者がゼロということですぐ思い当たるのは、これらの戦争がアメリカ本国では戦われていない、アメリカは戦場になっていないということだ。そして、あらためてアメリカの戦争の歴史をふりかえれば、ほとんどの戦争が、とくに二十世紀の戦争はすべて、アメリカの国外が戦場となっていることが分かる。第二次世界大戦で民間人の死者ゼロのアメリカは、それ以後、朝鮮、ヴェトナム、イラン・イラクと外国を戦場にした戦争を続けていて、いわば、戦争を「輸出」しているのではないかとさえ思えてくる。その意味で、アメリカの戦争の歴史上、国内が戦場となった19世紀の南北戦争の死者がその他のすべての戦争の死者を上まわっているのは象徴的なことだ。

つまり、一般のアメリカ市民は戦闘機の銃撃や爆撃機の空襲という恐怖を味わったことがない。自分の街や自分の家が破壊されることはないのだから、戦時中でも、一般市民はふだんとほとんど変わらない生活ができたのだ。自分の身内を戦争で亡くした人はいたろうが、人口比率が0.24%となると、わずか1000人に2人という少なさだ。それも戦争が続いていた4年間での数字だから、1年あたり2000人に1人ということになる。それくらいは、平常時でもニューヨークなら交通事故その他でありうる数字で、べつにそれほどのことではない。戦地の実戦の悲惨さを実感できないアメリカ人が多いのは、ある意味で当然のことなのだ。

9 サリンジャーの戦争

そんなアメリカ人の戦争にたいする鈍感さを切実に感じていたのがサリンジャーだった。1945年に書いた「よそ者」(“The Stranger”)では、帰還兵の主人公ベープが妹とセントラルパークの近くを歩いていると、太ったマンションのドアボーイがタバコを手のひらに隠して、ワイヤヘヤの犬を散歩させているのを見かける。ベープは「バルジの戦いのあいだもずっと、この男は毎日この通りであの犬を散歩させていたのか」と想像し、「考えられないことだ」と思う。ベープは故郷に戻りながらも、自分はまさに「よそ者」(stranger)なのだ、と感じてしまうのだ。「バナナフィッシュにうってつけの日」では帰還兵シーモアが、戦争にたいする想像力のない妻やその家族に囲まれ、車を木にぶつける、窓ガラスを割るなどの自傷行為を繰り返したあげく、自殺してしまう。「エズメに——愛と汚れをこめて」では、語り手がノルマンディ上陸作戦に備えて訓練を受けているイギリスへ届いた家族からの手紙を読むと、妻は近所のレストランのサービスが低下したと愚痴を言い、義母は暇ができたらカシミアの生地を送ってくれとせがんでいる。戦後のドイツに届いた兄からの手紙は、戦争も終わって暇だろうから、子供たちに銃剣やカギ十字を2、3個送ってくれという無神経な依頼をしている。

ヒュルトゲンの森やバルジの激戦で、ドラマティックではない、ただただ惨めなだけの死をいやというほど見つけてきたサリンジャーは、こんなアメリカ人に戦争の醜い現実を教えたいと思った。戦争というのは毎日が自分が生き残るために他人を殺して過ごす、醜い行為の連続だ。そこにロマンティックな精神など入りこむ余地はない。そんな精神を持っている人間がいたとしても、やがてその精神はすり切れてしまう。「未収録」の「ソフトボイルドな軍曹」(“Soft-Boiled Sergeant”, 1944)では、戦争映画ではハンサムな主人公がきれいな顔のままで死んでいく、おまけに死ぬ前にたっぷり時間があって、故国の彼女に甘い言葉を遺して死んでいく、と現実の戦争に無知な人びとを皮肉っている。戦争はヒーローの活

躍するドラマではないのだ。ウォルトも上官の気まぐれな命令でストーヴが爆発して死んだ。彼の事故死は、「華々しい」戦闘中の死とちがって、ドラマティックに英雄化のしようがない、ただただ惨めなだけの死なのだ。

サリンジャーは、戦争の醜い現実を教えるために醜い戦闘を描く、といういちばんてっとり早いやり方を取らなかった。生死を賭けた戦闘場面を描くと、どうしてもドラマティックになりがちだからだ。過去のそんな小説や映画にはうんざりしていたのだ。そこで彼はアメリカの日常生活を描いて、そこに戦争の醜さを反映させる、という困難な選択をした。「平凡な」人間の「不完全」のなかにこそ、真実があるからだ。国中が戦勝気分湧きかえるときに、あるいは人びとが戦争のことなど忘れかけているときに、醜い戦争の影が忍び寄りさまを描いたのだ。

エロイーズが結婚した1942年ころ、大学の友人たちも次々に兵士と恋をし、結婚したことがふたりの噂話で語られる。当時の青年たちは我も我もと軍に志願し、海外に出て行った。戦場に行けば生きては帰れないかもしれない、そう思うと恋人との仲に決着をつけておこななくてはならない。そんな思いを抱く青年、あるいはその恋人が結婚を急ぐことが多かった。これがいわゆる「戦争結婚」(war marriage)だが、急ぎすぎた結婚は多くの悲喜劇を生んだ。メアリ・ジェーンの結婚もすぐに破綻したし、噂に出てくる友人たちもうまくいかなかった場合が多いようだ。エロイーズは現実的な選択をしたのだろうが、けして幸せな結婚生活とはいえない。やはり、彼女も「戦争結婚」の犠牲者なのだ。

いっぽう、実戦を体験しなかったフィッツジェラルドは戦場の醜い実態を知らなかった。志願したプリンストン大学の同級生たちも、エリート集団だった。前線に立ったギャツビーについては、「彼は抜群の戦功を上げた。前線に赴く前には大尉だったのだが、アルゴンヌの戦闘のあとでは少佐に昇進し、師団機関銃部隊の指揮官に任ぜられた」(第8章)と、その活躍をめざましい昇進で語られるだけで、戦闘の具体的な描写はない。そして、戦争がギャツビーの人格に深刻な影響を与えた形跡はみられない。ギャツビーとフィッツジェラルドにはロマンティックな精神が生き残っていたのだ。

サリンジャーには、戦争から生きて帰った人間だけが伝えられる真実というものがある、という認識があった。そして、大好きな『グレート・ギャツビー』を自分なりに書き直してみようと思ったのだ。「コネティカットのひょこひょこおじさん」において、『グレート・ギャツビー』の「戦争勃発とそれによる恋人との別れ」、「そのあとの結婚の現実」、「ヒロインの墮落」などの枠組みを踏襲し、「取り戻せない過去」の主題も維持しながら、ロマンティックなギャツビーの夢の追求を、現実的なエロイーズの醜い現実のレベルに引き下げて、サリンジャーなりの『グレート・ギャツビー』の再構築を試みたのだ。そこに先輩フィッツジェラルドへの敬愛とともに、自分の世界観を主張する強い意志があったのは確かなことである。

<フィッツジェラルド (F S F) & サリンジャー (J D S) 対比年表>

1896,9	F S F 誕生	
1914,7	WW I 勃発	
1917,4	米 参戦	
1918,11	WW I 終戦	
1919,1		J D S 誕生
1920,3	『楽園のこちら側』	
1925,4	『グレート・ギャツビー』	
1939,9		WW II 勃発
1940,3		「若者たち」
1940,12	F S F 死亡	
1941,12		米 参戦
1945,8		WW II 終戦
1948,3		「ひよこひよこおじさん」
1951,7		『ライ麦畑』
2010,1		J D S 死亡

<引用文献>

- S. F. Fitzgerald, *This Side of Paradise*. N. Y. : Scribner's, 1920.
 ———— *The Great Gatsby*. N. Y. : Scribner's, 1925.
- J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown & Co., 1951.
 ————, *Nine Stories*. Boston: Little Brown & Co., 1953.
 ———— *Franny and Zooey*. Little Brown & Co., 1961.
 ———— *Raise high the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Introduction*.
 Boston, Little Brown, 1963.
- Kenneth Slawenski, *J. D. Salinger: A Life Raised High*. UK: Pomora Books, 2010.
- Warren French, *J. D. Salinger*. Boston: Twayne, 1963.

- S・F・フィッツジェラルド、『グレート・ギャツビー』野崎孝 訳（新潮社、1974）
村上春樹 訳（中央公論新社、2006）
- J・D・サリンジャー、『ライ麦畑でつかまえて』野崎孝 訳（白水Uブックス、1984）
村上春樹 訳（白水社、2003）
『ナイン・ストーリーズ』野崎孝 訳（新潮社、1974）
柴田元幸 訳（ヴィレッジブックス、2009）
- 『フラニーとズーイ』野崎孝 訳（新潮社、1976）
『大工よ、屋根の梁を高く上げよ シーモア一序章』野崎孝・井上謙治 訳
（新潮社、1980）
- ウォーレン・フレンチ、『サリンジャー研究』田中啓史 訳（荒地出版社、1979）

そのほか、『未収録』の短編からの引用は筆者の訳。